

<p>会報 第59号</p>	<p style="text-align: center;">Mt. Iwaki Conservation Association</p> <p style="text-align: center; font-size: 2em; font-weight: bold;">岩木山を考える</p>	<p>2012年12月21日発行 岩木山を考える会 会長 阿部 東</p>
--------------------	---	---

第33回東北自然保護の集い 報告

東北自然保護の集いが11月3～4日、青森県鶴田町、野鳥の渡りの飛来地でもある廻堰(まわりぜき)湖畔の宿舎を会場にして開催されました。「集い」には東北各地から19の自然保護団体から65名が参加し、「3. 11後の自然保護に私たちはどう向き合うか」というテーマで熱く語り合いました。一日目、最初に青森から二つの基調報告がありました。

ひとつはラムサール条約に登録されている仏沼オオセッカの現状と震災後の保護をめぐる課題。震災により太平洋沿岸の湿地が失われ、南への渡りが困難になっていることの危惧を指摘し、各県の連携の必要性が提起されました。

もうひとつの報告は津軽地方の風力発電の現状と課題です。震災後、東北地方への大規模風力発電施設の建設計画が目白押しとなっている中で、津軽地方にも複数の開発計画が持ち上がっており、自然破壊、動植物への悪影響への危惧が報告されました。



その後、各団体からの報告があり、夜は各県から持ち寄った酒で深夜まで交流を深めました。

「集い」二日目は、一日目に続いて各県からの報告の後、アピール採択に向けた問題提起と全体討議を行い、最後に「集いアピール」を拍手で採択しました。

アピールは、エネルギー消費社会から省エネルギー社会への転換、東北全ての原発施設の廃止、仏沼の環境保全、ダムに頼らない治水と利水、野生動植物の保護、東日本大震災が自然に与えた影響の継続的調査、などを求めています。

今回の集い青森大会では、岩木山を考える会からは二日間を通じて24名が参加。現地実行委員会の事務局団体として、受付や会場設営、看板の設置などで大きな貢献をしました。阿部会長は開会の挨拶、全体会議への問題提起など、集いの成功に向け中心的な役割を果たしました。

竹浪 純 記

第33回東北自然保護の集い・青森大会 アピール

1970年代から東北各地に多くの自然保護団体が結成されました。当時は、分水嶺に迫っていく「ブナ伐採」を食い止めることが大きなテーマでした。やがて東北の自然保護運動も大規模林道、ダム開発、スキー場開発、里山の保全、原発や核燃料再処理工場など、様々な方向の反対運動へと拡大していきました。

この運動は、国土開発の名のもとに東北の未開発地を食い物にし、都会のエゴや危険を押し付けるという国政や

企業との闘いでもありました。

3・11の震災を境に、福島農産物や電力が使えなくなり、日本の食糧やエネルギー、空気、水を支えているという東北が果たしてきた役割が国民に明確となりました。

今、私たちの運動は、東北の多くの仲間とのつながりを強化するとともに、日本国中の市民との連携が求められています。

私たちは第33回東北自然保護の集いの討議を経て、次のアピールを宣言します。

1. 福島第一原発事故に伴う放射能汚染は深刻な状況です。脱原発を推進し、再生可能エネルギーへの転換を図ることは勿論ですが、自然破壊を伴う大規模な風力発電や地熱発電開発を認めるわけにはいきません。エネルギー浪費社会から省エネルギー社会への転換に努力しなければなりません。
2. 原子力発電は、事故があれば膨大な自然破壊を招くことは福島原発が立証しています。六ヶ所村核燃料再処理工場、MOX 燃料による大間原発、東通原発をはじめとする、東北地方の全ての原発施設の廃止を求めます。
3. 仏沼の環境保全については、地域住民との協力関係をさらに深め、国や県に今後も環境維持のため水のポンプアップを続けるよう要請します。また、鳥たちの渡りの調査や生息地の環境調査を東北の仲間と協力して実施し、その保護・保全に尽します。
4. ダムに頼らない利水と治水について、原点に帰って見直し、生物の多様性を阻害するダムや堰堤を撤去し、魚道の整備を含め山から海までの水と魚の循環を確立することを求めます。
5. 野生動植物の保護で、現在もっとも急ぐべき課題は、奥山の自然の中でサルやクマが安心して暮らせるように広葉樹を保全し食糧となる堅果類(どんぐりなど)の保護・育成に取り組むことです。また、捕獲された動物たちの奥山放獣が容易となる環境づくりを森林管理局に求めます。
生息域の拡大を続けるニホンジカに関しては、早急に、適切な個体数の維持についての調査研究を進めます。
6. 東日本大震災が自然に与えた影響について、湿地や海岸林、そこを利用している鳥類や昆虫類などを含め調査記録するとともに、復興や環境保全が進むよう「東北自然保護の集い」で討議したことを基に次期岩手大会に向け協力関係を強化します。

以上

2012年11月4日

第33回東北自然保護の集い・青森大会 参加者一同

弥生スキー場跡地毎木調査報告

11/18(日)天気の合間を見て、竹谷幹事と一緒に弥生スキー場跡地の毎木調査を実施しました。9:10駐車場に着き、真っ直ぐな適当な枝を130cm に切り取り、第1エリアの10本から測定開始です。

辺りは草が枯れて、対象木はどのエリアも容易に捜し出す事ができました。

連日の雨のせいでしょうか？所々に広い水溜りが出来ています。各エリアへは近くまで車で移動し、そこから歩くので、短い時間で要領よく作業を終了する事ができました。

測定結果は別紙の通りですが、次回からは各エリア測定対象木の巻尺をあてた幹の部分に、小さなマーカーをつ



けておけば誤差が少なくなる様な気がします。

小雪が舞う寒い日でしたが、約1時間10分程で測定作業は無事終了しました。

花田 一雄 記

弥生スキー場跡地毎木調査結果データ

No	エリア	対象木	2012/11/18	前回(6/17)	前回との差
1	1	コバハンノキ	900	875	25
2	1	〃	810	766	44
3	1	シラカバ	505	495	10
4	1	〃	630	635	-5
5	1	〃	415	425	-10
6	1	カワヤナギ	667	650	17
7	1	カラマツ	477	475	2
8	1	〃	610	592	18
9	1	ヤマナラシ	250	252	-2
10	1	コバハンノキ	685	666	19
11	2	ニセアカシヤ	665	640	25
12	2	〃	657	685	-28
13	2	ヤマナラシ	745	720	25
14	2 枝下側	カワヤナギ	630	622	8
15	2	〃	990	965	25
16	2	ヤマコリヤナギ	125	135	-10
17	2	ヌルデ	460	450	10
18	2	カワヤナギ	540	520	20
19	2	〃	610	610	0
20	2	シラカバ	605	580	25
21	3 枝下側	コバハンノキ	550	535	15
22	3	シラカバ	327	325	2
23	3	ヤマコリヤナギ	155	155	0
24	3	カラマツ	390	375	15
25	3	〃	475	455	20
26	3 枝下側	クロマツ	250	242	8
27	3 枝下側	〃	277	292	-15
28	3	〃	385	360	25
29	3	ヤマコリヤナギ	210	185	25
30	3	シラカバ	237	235	2

弥生スキー場跡地観察会及び長平湿原植物調査で採取したコケの同定結果が出ましたのでお知らせします。

2012年6月17日(日) 弥生スキー場跡地観察会

2012年7月8日(日) 長平湿原植物調査

種名	学名
アラハヒツジゴケ	Brachythecium brotheri
トヤマシノブゴケ	Thuidium kanedae
コバノスナゴケ	Racomitrium barbulooides
オオハリガネゴケ	Bryum pseudotriquetrus
チヂレゴケ	Ptychomitrium sinense

種名	学名
アオモリミズゴケ	Sphagnum recurvum
ウマスギゴケ	Polytrichum commune
オオヒモゴケ	Aulacomnium palustre
ヒロハススキゴケ	Dicranella palustris
ヤノネゴケ	Bryhnia novae-angliae

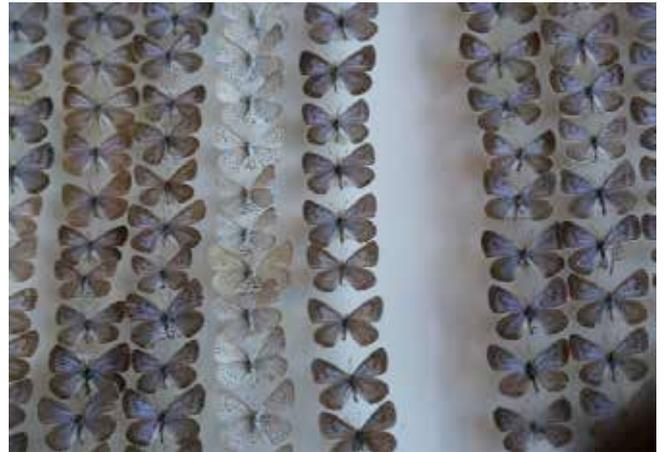
岩木山講座④ゴマシジミとミドリシジミ観察会報告

8月26日(日)10:00~12:00 参加者:10名

責任者 阿部東

8月22日下見。ススキが背丈より高く伸び湿原に入れなかったもので、観察径を刈り払ったが、蝶は全く見えず絶滅したものと考えていた。観察会当日の参加者は会員ばかり10人。観察径を広げながら、重点的に刈った部分を入念に調べた。

1. ゴマシジミの食草(幼虫の餌となる)であるシラホノワレモコウは今夏の乾燥によるせいかなり伸びていない。ススキがよく伸び、刈った所でも根本を残して広がり、ワレモコウを覆っている。ワレモコウの株は増えているが、花茎が生じていないものが多い。
2. 8月22日以降に発生した新鮮なゴマシジミは10頭近く観察され安心した。
3. ススキの刈り払いは、もう少し丁寧に行う必要があり、頭ばかりの刈り払いでは今年のような好天気では回復が激しい。
4. ミズバショウ沼の近くでシロバナのカモメヅルが確認された。(三浦章男著岩木山の花の山旅にはある)
5. ヤチハンノキに発生するミドリシジミは見られなかった。
6. ゲンジボタルの住む溪流にはカワニナは確認出来なかったが、マイタニシなど貝類は確認出来たのでまだ大丈夫と思われた。



ゴマシジミ

阿部 東 記

津軽のへムレンさん

新参者の佐藤です。今春、津軽ひろさき検定上級(おべ仙人)に合格したものの、もっと津軽の奥義を極めたく入会しました。宜しくお願いします。

さて、今回の観察会参加は年会費を納入し解散後に嶽キミと温泉を楽しむのが目的でした。蝶については全く無知で、それよりも嶽高原に初秋の気配を感じたかったのです。

(フランス人は蝶も蟻も区別せずバタフライというらしい...)

前日、飛び入り参加の電話をしたところ、阿部会長夫人の「お気軽にいらして下さい」とのお優しい返答に気を良くし、勇んでミズバショウ沼公園へ向かったのです。

すると、そこに待っていたのは想定外の光景でした。大の大人達が伸縮性の巨大虫網を手で一喜一憂している景色に軽いカルチャーショック、異端に触れた思いがしました。特に、会長には驚かされました。ぶつけたらしく膝を赤く滲ませながらも、少年のように蝶を追い自然と戯れる姿は、遠い昔に見たムーミンに登場する「へムレンさん」を思い出し、和みました。

結局、人間観察に終始してしまい、蝶のことは失礼ながらよくわかりませんでした。でも、ゆったりとした時の流れを過ごさせて頂き感謝です。また、参加します。

後日、ネットで調べたら、「へムレンさん」の名言を見つけました。お裾分けです。

「1つ1つのもののぴったりの場所が分かる人なんて滅多にいるもんじゃない。すべてのものを自分で全部生整理整頓できる人なんて本当に一握りしかいないんだ。」

(by へムレン)

佐藤 義広 記



8月26日の観察会について

まず、猛暑のため、ヨシ等がはるか見上げるまでに伸びた背丈に目が丸くなりました。そしてそれに競合して伸びた超ノップワレモコウにも目が点になりました。又、このワレモコウを減少、滅亡に向かわせないための我々人間の在り方(方法)を考える必要を思いました。(自然の推移に委ねる、又は神の意にまかせる、人間頭脳である程度手助けをして最良の方法を考え実施するか)

そして、あの場所がいかに大切かを人々に知ってもらおう保護に結びつけるか、逆に人に知られないようにするか、を考える必要性があるのでは。

散歩館においての会長の解説のその幅広い博学に対し、例によって関心した次第。

また、観察会直前に実施したと思われる観察者に対する事前の刈り払いとその労力に感嘆。

そして、本年の猛暑が生態系にも色々影響があったと思われることを感じました。

そして観察会解散後、良なのか、否なのかわかりませんが、小生個人があまりに伸びたカヤが気になって一部区域を刈り払っておきました。以上、当日の感想をまとめてみました。

齊藤 真人 記

岩木山講座⑤二子沼の紅葉とキノコ汁

10月28日(日)9:30~14:00 参加者30名

責任者:阿部 東

登山口で車を降り、30人を3つの班に分け出発した。二子沼の分岐は急な登りであるが、竹谷、花田会員がロープを張り、参加者の協力もあって無事通過。難なく沼に到着した。林道ばかりでなく、沼のシャッターポイントまで下見の時に竹谷会員が刈り払いをしていていた。

二班が上の沼を少し通り過ぎて戻ったりの失敗もあったが、全てうまく運んだ。沼に着いたあたりから、時々小雨がぱらつき始めた。紅葉は少しピークを過ぎていて、褐色が増えていたが、いかにも深山の湖にふさわしい佇まいに全員満足した。

雨に追い立てられ急いで下山、駐車場に着く。

ブルーシートと木の枝で瞬く間にテントが設営され、昼食となった。サモダシ豚汁が出、雨に濡れることなく最後の山行を終えた。仙台からの参加者2名を加えた観察会だったのに参加者の感想を発表して頂くことも忘れてしまい、解散になったのが悔やまれる。

いつも感心させられるのは、会員はじめ参加者のけれん味のない協力である。岩木山講座の毎回の成功は、ここにあることを痛感した。

このたびの発見は、数年前にも1度確認されたルリクワガタの産卵マークを沢山ブナの木枯に発見したことである。岩木山ではここ50年二子沼以外ではルリクワガタが確認されていない。絶滅が心配されていたものであった。

阿部 東 記

スタッフの臨機応変

岩木山講座⑤ 二子沼の紅葉とキノコ汁観察会に参加させていただきました。初参加です。最も感動したのは、ブルーシートテントであつという間に張られたことでした。当日は雨天予報で、いざキノコを煮るという段になってぼつぼつ、しとしとと降り始めた雨。あらら...と思う間もなく、スタッフの皆さんは、まるで事前に打ち合わせでもしていたかのように機敏にわらわらと動き回り、枝を切ったりザイルを車に結んだりして、さっさとブルーシートで20人入れる応急テントを作ってしまったのでした。

月探査機の酸素タンクの攪拌機がショートして爆発し、帰還させるのに手に汗握る大苦勞をしたというNASAの実話を映画化した「アポロ13号」という作品があるのですが、その中に、母船の筒型の二酸化炭素除去装置に月着陸船の四角いフィルターを詰めろ、というシーンがあります。当然、フィルターは入りません。別々の企業に発注したからだ、ばかだ、と誰かが文句を言う。このままではあと2時間で乗組員3名全員窒息する、という緊迫したその時、ゴムホースの部品やビニール、ガムテープなどがごちゃっと置かれたテーブルを前にして NASA の主任が叫ぶのです。



「アクエリアスの中にあるのはこれだけだ。やるんだ。ここにあるだけのものを使って。さあ始めよう。誰かコーヒーを持ってこーい！」

雨の中でこのシーンを思い出したのは、山には、自分が持って行ったモノしかない、ということ再認識したからです。雨などはアクシデントのうちに入らないと思いますが、雪崩やビバーク等、本当の非常事態でも、この人達ならそこにあるだけのものを使って何とか打開できてしまうのではないかな、と思わせる自信に満ちたブルーシートテント建設現場の様子でした。ブルーシートの支柱にするとして切った枝を、枝分かれしている側を下にして安定させて立てた、というのも、目からウロコの新技术。キノコ汁もおいしかったです。皆様、さすがです。

三浦 協子 記

360度ぐるりのブナ林

「黄葉しているブナの林は、明るいですよー。」晴れの期待がはずれ、あいにくの曇り空。やがては雨がおちてくるだろうと、空を見上げた私の心に、会長の東さんの声が明るく響いた。

しきつめられた石の駐車場に、ジャリジャリジャリと音を立てて、次々に車を寄せた人の数を数えたら30名をこえている。以前の例会で顔をあわせた方が何人かおられたが、どちらから来られたかわからなかった人も、黄色のブナに囲まれてレクチャーを耳に傾けていたら、まるで旧知の仲間に。

昔の登山道といわれたが、案内板もない。会の例会で来なければ、二子沼があることも知らなかっただろう。あとで何人かの人に岩木山の二子沼のこと話したが、弘前に住んでいてもほとんどの方が知らなかった。

山道は2ヶ所をのぞいて(サポートしていただいたので安心)、時を費やして落葉したブナの葉のフッカフカのじゅうたんで、フットワークもこち良い。

林は本当に明るかった。時おりの冷たい風が空から葉を降りおろす。木と木の向こうに岩木山の三角形が見えたのも嬉しい。何か別の山を見ているような、いつもと表情がちがって見える。

パラっと降ってきた雨に、ブルーシートと大黒柱とは縁もゆかりもない細い枯木があんな風に役立つとは、立って見ていた隣の女性と同感の笑い。簡単に握ってきたオニギリが、キノコ汁のおかげで美味しかったこと。

二子沼は一周できるのだとか一ほりをめぐることができたら、最高だったかなと、10月28日のことを思い出した時に感じた。キノコ採りは次の機会のお楽しみとなった。

五十嵐 吉美 記

★今後の予定(2013年1月からの活動・行事等)★

* 新年会のご案内 *

会の新年会を開催します。来年一年どんなことをしたいか、会でやってほしいこと、自分がやりたいことなど、出し合いながら交流しましょう。是非、どしどしお申し込みください。

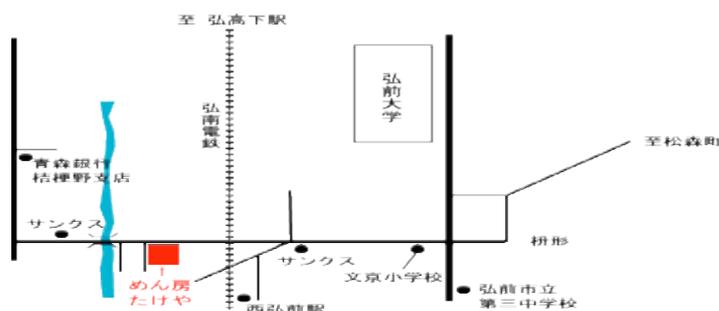
日時:2013年1月8日(火)19:00~21:00

場所:稔町「めん房たけや」(Tel:36-8938)

会費:3,000円

申込先:三浦宅(0172-35-6819)

申込締切日:12月29日(土)



* 第19回写真展「私の岩木山」開催と出品・会場展示のお願い *

開催日:2013年2月8日(金)~2月10日(日)

開催時間:午前10時~午後5時まで(但し、最終日は午後4時まで)

開催場所:NHK 弘前放送局ギャラリー(弘前市下白銀町)

* 出品について

会報に同封された「出品票」に必要事項を記入し、2月7日(木)午後3時~4時までに会場に搬入して下さい。(※目録を作成しますので、搬入時間厳守でお願いします。)

* 出品作品について

岩木山に関連ある写真であればどのような写真でも構いません。お1人5点までとさせていただきます。額に入れてご持参下さい。

* 展示について

2月7日(木)午後4時より展示しますので、お手伝いをお願いします。最終日の午後4時より後片付けを写真の返却を行います。

* 岩木山講座⑦「岩木山の成り立ち」 *

概要:山裾が地平線まで伸びている岩木山は、富士山に劣らず日本一姿の美しいコニーデ型の山とも言えるかも知れません。しかし岩木山の地層を調べると、二つの異なった年代の生成過程が見て取れます。噴火による隆起と浸食を繰り返した岩木山はいつ頃、どのようにして今の形になったのでしょうか。日本科学者会議会員である講師が、岩木山造山の秘密を探ります。

日時:2013年3月24日(日)午後14:00~16:00

場所:弘前市民参画センター3階研修室

講師:松山力先生(日本地質学会会員)

* 2013年岩木山を考える会度総会開催のご案内 *

日時:2013年4月6日(日)13:30~

場所:弘前市民参画センター

多くの会員の皆さんの出席をお願いします。※役員改選の年です。

鳳鳴避難小屋の建替え問題に関する、岩木山を考える会会員の紙上意見交換を行います

会長 阿部 東

1. 避難小屋建替え問題

岩木山九合目にある鳳鳴避難小屋の建替え問題が浮上しています。弘前市観光物産課は、平成24年度の予算作成過程で、建替えの設計委託費300万円を要求しましたが次年度以降に見送られました。観光物産課によると、平成25年度の予算要求に向けて、市民の意見を聴きながら引き続き検討していくとしています。

2. 岩木山頂付近の避難小屋の現況

現在、岩木山頂付近の建物は、岩木山頂避難小屋とトイレ、九合目の鳳鳴避難小屋、そしてスカイラインターミナルのリフト終点施設と、3カ所に設置されています。また、スカイラインターミナルから山頂までは、津軽国定公園の特別保護地区に指定されており、植物の伐採採取はもちろん、環境に悪影響を与える行為は厳しく制限されています。

3. 鳳鳴避難小屋の現況

鳳鳴避難小屋の現況ですが、室内の老朽化が進み、簡易ベッドの床が破損しています。トイレは併設されていますが、現在は垂れ流し構造で、環境維持上大きな問題になっています。窓枠、屋根、入口はしっかりしており緊急避難時には堪えるものの、快適な環境とは言えません。

4. 歴史的経過

鳳鳴避難小屋が建設されたのは、大館鳳鳴高校の生徒4人の遭難事件後、昭和40年9月のことです。二度と悲惨な事故が起きないようにと、遺族が寄付金を募りました。寄せられた基金をもとに青森県が岩木町とともに現在地に建築をしました。小屋が建てられる前のこの場所は、ミチノクコザクラなど高山植物が咲き乱れる自然豊かな場所だったそうです。鳳鳴避難小屋建設後、昭和41年にはスカイラインターミナルからのリフトが開通し、リフト終点にも観光施設が設置されました。こうして特別保護地区内の歩いて15～20分ほどの場所に3つの施設が建ち並ぶという状態ができあがりました。

岩木山を考える会幹事会では春から、鳳鳴避難小屋の建替え問題について議論をしてきました。岩木山の自然を守り、活用していく上で、何が大事なことから、会として一定の見解を持ち、弘前市に提案していくことが必要だと考えるからです。その結果、幹事会ではこの間出されている意見を会員みなさんに公表し、率直な意見を募ろう、ということになりました。

以下、この間、出されている意見を紹介します。全体として小屋撤去の方向で議論が進んでいますが、みなさんからのご意見をいただければ幸いです。いただいた意見は、会報やホームページ等で公開し、幹事会として整理検討しながら、4月に予定されている定時総会で方針にまとめ上げます。

< 幹事会で出されている意見 >

1. 自然環境保護の立場から

- ・建て替えに当たり、鳳鳴避難小屋にトイレを作るのは反対。
- ・今現在、次のような利用のされ方をしている→観光客、登山者、物置、休憩、荒天時避難、宿泊、トイレ。
- ・岩木山頂付近に3つの施設は不要。
- ・垂れ流しトイレはやめるべき。頂上にバイオトイレが新設され、二つは不要。基本はターミナルで用を済ませてもらうこと。

- ・先日岩木山に登った折、県外からの観光客が鳳鳴小屋の存在を批判していたのを耳にした。
- ・現在の避難小屋は、使用に耐えないものとなっているので撤去はやむを得ない。しかしその後、新たに避難小屋を作るべきかどうか、に関しては慎重な検討が必要である。十分なアセスメントや議論を経て結論を出してはどうか。
- ・8合目から上は自然公園法の特別保護地区となっているので、建築物も公共性を有するものとしてターミナル終点施設の利用を弘南バスと協議できれば。
- ・避難小屋が出来る前は一帯高山植物が咲き乱れていた場所。避難小屋が出来てからなくなってしまった。現在の建物撤去により、回復が見込めるかも知れない。岩木山頂部分も昔は、ハイマツで覆われていたものだが、お山参詣によって裸になってしまった。人間の利用・活動により自然が荒らされていることを認識すべき。こうした視点で、避難小屋の設置問題を考えたい。

2. 特に冬山登山の避難小屋機能に関して

- ・リフト終点の施設を避難小屋と兼ねるようにすれば、鳳鳴小屋は不要ではないか。
- ・労山会員からは、あった方が便利である、との意見が出されている。しかし、なければならぬというものでもない。ターミナル終点の施設を利用できればそれでよい。
- ・あればあるにこしたことはない。
- ・鳳鳴高校関係者からも意見をうかがうべき。

<私の意見>

氏名 _____ (匿名希望 する しない)

※いただいた意見は基本的に次号の会報に掲載します。掲載を希望しない方はその旨記載下さい。

送付先: 〒036-8162 弘前市安原3丁目3-11 岩木山を考える会事務局長 竹浪 純 宛

FAX 0172-88-6656 Mail takenami@coral.ocn.ne.jp

＜寄稿＞ 川の働きと海の生産性ー珪酸についてー

阿部 東 記

川から海に運ばれる鉄については以前何かで触れたように思います。鉄はタンニンと結合し水溶性となり、腐植酸と結合して海に運ばれる。特に、植物の破片と共に海の表面に浮き植物性プランクトンにとりこまれ、葉緑素を作る酵素の原料となる。ロシアウスリー河下流部の大湿原と、そこから流れ出る植物の遺体を含んだ水が日本海北東部の大漁場を支えていたといわれる。

しかし一方では、イネ科植物に含まれ、イネの倒伏を防ぐ物質として注目され、堆肥を入れなくなった水田では不足しがちなので、珪酸カルシウムを肥料として補ってきた。近年イネはワラを使わないので倒伏を防ぐため草丈を低くし、珪酸カルシウムを入れなくなったという。(珪酸石灰の生産量1968年1,400×1,000トで最高、2002年236×1,000ト、1965年から珪酸の不足が知られ生産が始まった。)珪酸はガラスの成分(岩石の成分)だが、イネ科植物に多量に吸収され含まれる。したがって、ウスリー河などの湿地の植物(イネ科が中心)の遺体には(堆肥や牛馬の糞にも)珪酸を含み、ウスリーから海に流れ、そしてこの海域の植物性プランクトン(主として珪藻)の育成を促してきた。このように河川からの珪酸は、河川の周りの植物の遺体と共に海に運ばれ、海の珪藻を育て、それを食べる小魚(イワシやサンマ)を育て、更にそれを食べるサケやマグロを育てていたのでしょうか。日本近海では、今や湿地はおろか植物の遺体が川に流れることも少なくなり、水田で堆肥は使われず珪酸カルシウムも使われなくなって、恐らく植物性プランクトンは五分の一位に減っているのであろうと推測されている。近海のサンマの不漁の原因は、水田での堆肥や珪酸カルシウム肥料を使わなくなったことが原因(野田公夫他2011年)という報告があります。

文献:野田公夫・守山弘・高橋佳孝・丸鬼康彰2011里山遊休農地を生かす 農文協 東京

* 会員の皆さんへお願い *

 岩木山に関する情報やこういう事を会員皆と共有したいと言った希望がありましたら、事務局までご一報下さい。会報は会員の皆さんの交流の場です。また、寄稿なども大歓迎です。

 「岩木山を考える会」の会員継続手続きをお願いします。会費納入は4月会報に同封した振替用紙でお支払い頂くか、最寄りの幹事までお届け下さい。

＜編集後記＞

残暑厳しい秋から一転、今は大雪に見舞われています。りんご園の雪囲いや薪の準備も終わらぬまま雪が積もり我が畑の中の小さな家には車が入れなくなりました。これから冬は除雪の入る道路端から歩いて家まで歩かねばなりません。子供たちはジャンボそりに乗せて。道路まで片道150mぐらいですが今年から毎日子供を保育園に連れて行かなければならないので大変です。でも、やっぱりコンパクトで省エネなこの家が好き。我が家の電気代は月2000円。なかなかやるでしょ？世の中不便も楽しさに変えていく工夫が必要ですね。この会報が発行されたときにはもう選挙結果が出ているのですね。ここ数年で若者の価値観はモノやお金中心から変わってきている気がします。ただ、それですぐには目に見えた変化は起こらないでしょう。焦らず着実に世の中を良くしていきたいです。ガンジーさんも言っていました「善きことはカタツムリの速度で動く」と。

小倉 慎吾 記

会報「岩木山を考える」第59号(2012年12月21日発行)発行/岩木山を考える会/会長 阿部 東

〒036-8336 青森県弘前市栄町4-12-2/電話 0172-36-4205 事務局長 竹浪 純/電話080-5229-6076

郵便振込口座番号 02380-0-37914 振込先:岩木山を考える会